

2020年 博士フォーラム実施報告書

博士学生が楽しく研究生活を送るために は何が必要か

日時

2020年12月11日(金) 13:30～17:00

Zoom を用いた遠隔会議としてオンライン開催

幹事校 東京工業大学

目次

| | | |
|--------|------------------------------------|----|
| 1. | はじめに..... | 3 |
| 2. | 参加者 | 4 |
| 2.1. | 2020年 博士フォーラム実施委員会 | 4 |
| 2.2. | 参加者一覧..... | 5 |
| 3. | プログラム | 9 |
| 4. | 講演..... | 10 |
| 4.1. | 講演1 「企業をめざす博士学生のみなさまへの期待」 | 10 |
| | 講演者：三菱電機 先端技術総合研究所 東 聖 氏 | 10 |
| 4.1.1. | 講演の概要..... | 10 |
| 4.1.2. | 講演の内容..... | 10 |
| 4.2. | 講演2 「博士ポストクの企業就職」 | 11 |
| | 株式会社アカリク 事業推進室 吉野宏志 氏..... | 11 |
| 4.2.1. | 講演概要 | 11 |
| 4.2.2. | 講演内容 | 11 |
| 4.3. | 講演3 「心身の健康を保つために知っておきたいこと」 | 12 |
| | 講演者：東京工業大学 保健管理センター 教授 安宅勝弘 氏..... | 12 |
| 4.3.1. | 講演概要 | 12 |
| 4.3.2. | 講演内容 | 12 |
| 5. | 博士課程実態調査アンケート結果の報告..... | 13 |
| | 2020年博士フォーラム 実行委員会..... | 13 |
| 5.1. | アンケートの概要..... | 13 |
| 5.1.1. | アンケートの目的..... | 13 |
| 5.1.2. | アンケートの方法と設問..... | 13 |
| 5.2. | アンケートの結果..... | 14 |
| 6. | 参加者によるグループディスカッション..... | 16 |

| | | |
|--------|------------------------------------|----|
| 6.1. | グループディスカッション概要 | 16 |
| 6.2. | 各ブレイクアウトルームのディスカッションの内容 | 16 |
| 6.2.1. | ブレイクアウトルーム 1..... | 16 |
| 6.2.2. | ブレイクアウトルーム 2..... | 16 |
| 6.2.3. | ブレイクアウトルーム 3..... | 17 |
| 6.2.4. | ブレイクアウトルーム 4..... | 17 |
| 7. | 参加者アンケート集計結果..... | 18 |
| 7.1. | Q1: 博士フォーラムに参加した動機 | 18 |
| 7.2. | Q2: 本年の博士フォーラム開催を知ったのは? | 18 |
| 7.3. | Q3: 今回のフォーラム会議全体を通しての満足度 | 19 |
| 7.4. | Q4: 講演に対する満足度 | 19 |
| 7.5. | Q5: 印象に残った講演 | 20 |
| 7.6. | Q6: アンケート結果の報告に対する満足度 | 20 |
| 7.7. | Q7: グループディスカッションに対する満足度..... | 21 |
| 7.8. | Q8: グループディスカッションに対する意見・感想..... | 21 |
| 7.9. | Q9: フォーラムの形式についての希望..... | 22 |
| 7.10. | Q10: 今後の会議開催において、希望するトピック・内容 | 22 |
| 8. | おわりに..... | 23 |

1. はじめに

一般社団法人八大学工学系連合会（北海道大学，東北大学，東京大学，東京工業大学，名古屋大学，京都大学，大阪大学，九州大学）は，八大学に属する9工学部，及び25研究科・研究院で構成し，互いに協力して諸課題の課題抽出や情報交換を行いながら，課題解決や対外的な意見発信を行ってきた。この連合会事業の一つとして，博士フォーラム事業があり，八大学が持ち回りで開催している。2020年は，東京工業大学が幹事校となり，「博士学生が楽しく研究生活を送るためには何が必要か」という主題でフォーラム事業を行った。

上記の主題を掲げた理由として，博士進学の様子は研究室ごとの差が大きく，特定の研究室に学生が集まる傾向がある。その要因の一つには，博士課程に在籍する先輩の影響があると考えられる。すなわち，博士学生が研究室で楽しく研究を行っている姿を見せることは，修士・学士課程の学生に博士課程進学を促す上で効果的な方法の一つと言える。しかしながら，博士学生には，経済的問題や研究室での孤立，アカハラ・パワハラなど種々の困難が存在しており，修士・学士課程の学生が博士進学を決心する際の妨げとなっている。本フォーラムでは，アンケート結果や専門家の講演などにより話題を提供し，グループディスカッションを行って，今いかなる改革が求められているのかを探ることを目的とした。

2. 参加者

2.1. 2020年博士フォーラム実施委員会

- 学生委員

| | | |
|-------|---------------------|----|
| 橋本啓太郎 | 東京工業大学 工学院 | D1 |
| 笹原 悠輝 | 東京工業大学 物質理工学院 | D2 |
| 峯岸 美紗 | 東京工業大学 生命理工学院 | D2 |
| 栗原 遼大 | 東京工業大学 環境・社会理工学院 | D2 |

- 教員

| | | |
|-------|-----------------------|--|
| 植松 友彦 | 東京工業大学 工学院 学院長 | |
| 山中 一郎 | 東京工業大学 物質理工学院 副学院長 | |
| 藤田 英明 | 東京工業大学 工学院 副学院長 | |

2.2. 参加者一覧

- 講演者

| | |
|-------|--------------------|
| 東 聖 | 三菱電機 先端技術総合研究所 |
| 吉野 宏志 | 株式会社アカリク 事業推進室 |
| 安宅 勝弘 | 東京工業大学 保健管理センター |

- 教職員

| | |
|-------|-------------------|
| 中村 孝 | 北海道大学 |
| 大町真一郎 | 東北大学 |
| 金谷 晴一 | 九州大学 |
| 西郷 浩人 | 九州大学 |
| 鎌滝 晋礼 | 九州大学 |
| 園田 佳巨 | 九州大学 |
| 中島 邦彦 | 九州大学 |
| 亀井 靖高 | 九州大学 |
| 石原 直 | 八大学工学系連合会 東京大学 |

● 参加学生（博士課程学生）

| | |
|-------------------|-----------|
| 石田 美月 | 東京大学 |
| 岩井 愛 | 北海道大学 |
| 今泉 薫 | 名古屋大学 |
| 鎌田 弥成 | 北海道大学 |
| 永井 美和 | 大阪大学 |
| 宗近 洸洋 | 東京工業大学 |
| YIN Tingyu | 東京工業大学 |
| 亀田 希夕 | 大阪大学 |
| 辻 赳行 | 東京工業大学 |
| Dhina Fitriastuti | 東京工業大学 |
| 渡邊 大貴 | 名古屋大学 |
| 西條 未来 | 総合研究大学院大学 |
| 坂井 浩紀 | 北海道大学 |
| DONG KAIXIN | 北海道大学 |
| 伊東 智寛 | 名古屋大学 |

| | |
|----------------|-----------|
| 三上 裕也 | 九州大学 |
| Hiraku Tokuma | 東京工業大学 |
| 森 竣祐 | 東北大学 |
| 大石 若菜 | 東北大学 |
| 木田 淳平 | 東京工業大学 |
| 長坂 龍洋 | 大阪大学大学院 |
| タナワット | 東京工業大学 |
| 熊谷 康平 | 大阪大学 |
| 佐々木友弥 | 大阪大学工学研究科 |
| 上村 祐也 | 大阪大学 |
| ジャンペイ | 東京工業大学 |
| 木村 駿太 | 東京大学 |
| ● 参加学生（修士課程学生） | |
| 川口 貴大 | 北海道大学 |
| 棚橋 慧太 | 北海道大学 |
| 柴田 衛 | 東京工業大学 |

森部天仁

名古屋大学

野口 真司

北海道大学

豊田 修与

東京工業大学

Hiromu Hattori

University of Graz

3. プログラム

- 13:30-13:40 開会の挨拶 東京工業大学 植松友彦 工学院院长
主旨の説明 東京工業大学 藤田英明 副工学院院长
- 13:40-14:20 講演「企業をめざす博士学生のみなさまへの期待」
三菱電機 先端技術総合研究所 東聖 部長
講演「博士ポスドクの企業就職」
株式会社アカリク 事業推進室 吉野宏志 マネージャー
- 14:20~14:50 「博士課程実態調査アンケート結果の報告」
2020年博士フォーラム 実行委員会
- 14:50-15:00 (休憩)
- 15:00-16:10 参加者によるグループディスカッション
- 16:10-16:30 グループワークのまとめ
- 16:30-16:50 講演「心身の健康を保つために知っておきたいこと」
東京工業大学 保健管理センター安宅勝弘 教授
- 16:0-16:50 閉会の挨拶 東京工業大学 藤田英明 副工学院院长
- 17:00-18:00 意見交換会

4. 講演

4.1. 講演 1 「企業をめざす博士学生のみなさまへの期待」

講演者：三菱電機 先端技術総合研究所 東 聖 氏

4.1.1. 講演の概要

就職に関して、博士学生の受け皿となる企業等が少ない、博士課程に進学した学生の方が修士学生よりも不利になるなどの蜚語が巷に飛び交っている。比較的多くの博士学位取得者がいる三菱電機 先端技術総合研究所 東氏から、博士学位取得者の勤務状況や博士学生の採用状況などについてご講演いただく。

4.1.2. 講演の内容

本講演の講師である三菱電機 先端技術総合研究所 東氏自身も博士課程学位取得者であり、博士学位取得して企業で働く研究者・開発者としての立場から、企業における博士課程学位取得者の勤務や博士課程修了者の採用について講演をいただいた。

博士課程に進学した学生の多くは研究職に就くことを希望していると思われる。企業における研究開発は、大きく分けて基礎研究と応用研究に分けられるが、最終的には、製品化・事業化することを目指している。同社では、研究者の約 1/4 が博士学位取得者である。いずれの企業においても、毎年の売上高に対して一定の割合の研究開発費を計上し、継続的な研究開発への投資が行われていると思われる。

研究所等における研究者・技術者の役割としては、新しい技術を研究し、新製品等を開発することである。特に、博士学位取得者には、新事業・新コンセプトを生み出すことも期待されている。

また、東氏自身の個人的な見解と断ったうえで、博士課程学生の間にご学ぶべきことなどについてアドバイスがあった。

4.2. 講演2 「博士ポストクの企業就職」

株式会社アカリク 事業推進室 吉野宏志 氏

4.2.1. 講演概要

アカデミアになること希望している博士学生やポストクも少なくない。博士課程への進学は、企業就職に不利であるとも言われている。博士学生やポストクの企業就職の状況やどのような企業がどのような博士学位取得者を求めているのかご講演いただく。

4.2.2. 講演内容

日本の企業における博士学位取得者の割合は 5%程度であり、博士学生は就職に不利であるなどと言われている。企業や職種によっては必ずしも不利ではなく、特に研究開発職に就くのであれば不利になることは少ない。ただし、企業における研究開発職がどのようなものであるかを学生が理解していない場合には、採用に結びつかないケースも少なくないと言う。

まず、博士学生の進路として、企業かアカデミアかを選択する必要があるが、将来的・最終的にどうなっていたいかを考えてキャリアパスを逆算する必要がある。何をしたいのか、何に喜びを感じるかを明確にするのが判断する上で重要になる。世の中に直接的な価値を生み出したい気持ちが強い人は、企業就職に向いている。

一方で、企業の経営者が求める人材像としては、高いスキルを持っているだけでなく、チームワーク能力を持ち、粘り強く働けることなどを挙げている。専門的な知識・能力だけでなく、汎用的な基礎能力、人間的な魅力などを備えていることが必要とされる。特に、博士学位取得者の価値を知っている企業・経営者の場合には、単なる「専門家」としてではなく、新事業や新コンセプトを打ち出すことのできる「戦略家」として採用している。

博士学生と採用する企業の両方が、博士学位取得者の価値を理解することが必要と言う。

4.3. 講演3 「心身の健康を保つために知っておきたいこと」

講演者：東京工業大学 保健管理センター 教授 安宅勝弘 氏

4.3.1. 講演概要

心と体の健康は、研究だけでなく、日常の生活を送る上でも重要であるが、特に博士学生を取り巻く環境や状況から、比較的高いストレスを感じていると考えられる。ストレスに関する知識とともに、これに対する研究室・教員のサポートなどについてご講演いただく。

4.3.2. 講演内容

博士課程の学生は、学内や研究室での立場や責任から、種々のストレスに曝されていると言う。ストレス学説では、ストレスには、物理的、生物学的、認知的なものなどが存在するが、特に心理社会的なストレスが強く関係する。

心理社会的なストレスの原因となるストレッサには、人間関係、役割上の問題、様々な欲求、生活環境の問題などが影響する。これらのストレスに対する反応は、自律神経や免疫、アレルギー系にも影響を与え、ストレス関連疾患を引き起こすことがある。

学生と教員に対して行ったストレスチェックの結果から、学生のストレスの傾向は学年によって差異があり、単に学士課程の学生に比べて、大学院学生の方が高いストレスを感じているというだけではなく、特に博士学生のストレス分布は、教員のストレスに似通った分布になっていると言う。

ストレス関連疾患に対しては、認知療法や認知行動療法が行われている。これは、非合理的に感じる思考を合理的と感じる思考に転換するもので、同じ状況であっても、受けるストレスを軽減することができる。特に、感情で物事を判断してしまう「感情的決めつけ」やネガティブなことに注意が向いてしまう「選択的注目」などの「認知の偏り」に陥りやすい。これに対しては、周囲とのコミュニケーションやサポートが重要であると言う。

5. 博士課程実態調査アンケート結果の報告

2020年博士フォーラム 実行委員会

5.1. アンケートの概要

5.1.1. アンケートの目的

博士学生には、経済的問題や研究室での孤立、アカハラ・パワハラなど種々の困難が存在すると考えられる。本フォーラムの「博士学生が楽しく研究生活を送るためには何が必要か」という主題に対して、広くアンケートを実施して博士課程学生の実際の状況などを調査し、その実態を把握するとともに、グループディスカッションへの話題を提供することを目的とする。

5.1.2. アンケートの方法と設問

本アンケートでは、博士課程学生の実態を調査することを目的としている。したがって、現在博士課程に在籍している学生だけでなく、すでに博士課程を修了もしくは退学している方からも回答を得ることが望ましい。したがって、八大学工学系連合会 運営委員会のチャンネルを用いて実施しただけでは、このような回答を得ることは難しいと判断し、今回は Google フォームを用いて無記名のアンケートとして作成し、Twitter を通じて回答の依頼を拡散することにした。

アンケートの設問は以下の通りである。

1. 概要

研究生活について

2. 進学について

博士課程進学理由、博士課程進学を決意した時期、所属研究室に博士課程の先輩がいたか、博士課程進学に不安はあったか

3. 研究遂行・生活について

研究時間について、研究室の指導について、研究室生活について（居心地、人間関係、研究室の雑用、教員と後輩との板挟み）

4. 研究の楽しさについて
入学前の想像と比べた実際の博士課程の楽しさ，研究の楽しい点，博士課程の魅力，後輩への博士課程進学のおすすめ度具合
5. 経済的な状況について
あなたの経済的な状況，入学前の想像と比べた実際の博士課程の経済的な状況，経済的な状況（詳細）
6. 研究の状況について
入学前の想像と比べた実際の博士課程の研究状況，博士号取得について，実験の進捗について，論文の執筆許可状況
7. 心身の状況について
 - 研究室内で研究生活を相談できる相手，研究室外で研究生活を相談できる相手
 - 入学前の想像と比べた実際の博士課程の精神的辛さ，
 - 睡眠は十分か，精神的な現在の状況
 - パワハラ・アカハラ・いじめ，セクハラ
 - 恋愛の現在の状況，博士課程期間のパートナーとの出会い，博士課程・研究室と恋愛について
8. その他

5.2. アンケートの結果

アンケートには、210件の回答が寄せられた。そのうち、66%は現在博士課程に在籍している学生（社会人博士4%を含む）であり、博士課程修了者（博士学位取得者）は28%であった。研究生活について、楽しいとこと答えた者は174名であったが、辛いと回答した者も79名おり、辛くても楽しいと複数回答を選択したものが多い。自由記述には、「趣味」「生きがい」と答えた者もあり、多くは研究生活を楽しんでいると思われる。ただし、コロナ禍の影響で状況が変わりつつあるとの回答もあった。

進学を決定した理由については、研究が好きであることや修士研究を継続したいなどが上がっていた。進学を決意した時期についても、卒業研究に携わった後が8割を占め、研究室に所属し、実際に研究に行ったことが進学を決

める大きな要因となっている。博士課程進学に関する不安要素として、修了後の就職の不安、経済的な不安、博士学位取得に関する不安などが挙げられている。

研究室での生活状況についての問では、居心地、人間関係は比較的良いとの回答が多い。一方で、研究室内の雑用があると回答している学生が多く、研究室の装置・薬品の準備や教員の雑用、後輩の面倒などが挙げられている。

研究の楽しさについては、8割の学生が、博士課程入学前と比べてほぼ想像通り、もしくは想像以上と回答している。その一方で、後輩へ博士進学を勧めるかの設問に対しては、「勧めない」の回答の方が「勧める」の回答を上回っており、自由記述には、「自己責任」「安易には勧められない」などの記述があり、後輩の学生が自身で判断すべきと考えているものと思われる。

経済的な状況については、余裕があると答えた学生が困窮していると答えた数を上回っている。一方、想像以上に大変と回答した者も多い。日本学術振興会の特別研究員に採用されたり、奨学金を貸与・受給している者や、保護者等と同居していたり支援を受けていたりする者が多く、平均的な経済的状況は比較的悪くないと思われる。しかし、いずれの経済的支援も得られていないケースもあり、経済的な状況には大きな格差があると思われる。

自身の博士研究の進捗については、想像以上に大変、芳しくないと答えた者が想像以上に余裕、順調と答えた者よりも多い。回答者の10%程度は、学位取得が難しいと感じている。また、博士課程の精神的な辛さは想像以上と回答するものが比較的多い。

アカハラ、パワハラ、セクハラ、いじめなどについては、問題ないと回答した者が多いが、少数ではあるが実際に受けたことがあるとの回答もある。一方、恋愛の状況については、半数程度の学生はパートナーがいると回答している。博士学生や研究職は出会いが少ないと言われているが、実際パートナーがいると回答したうち、パートナーが研究室所属以前からの知人である場合約半数を占めている。

本アンケートは、無記名で実施したこともあり、自由記述欄には、様々な意見・コメントが寄せられており、全てを一般に公開することは難しい。今後アンケートの集計結果をどのように活用するのも課題の一つである。

6. 参加者によるグループディスカッション

6.1. グループディスカッション概要

グループディスカッションでは、4つのブレイクアウトルームに分かれて、意見交換・討論を行った。講演やアンケートの内容を話題として提供したが、特にテーマは限定せず、参加者が日頃から思っていることなども取り上げてもらった。

グループディスカッションの後で、「まとめ」として各ブレイクアウトルームの報告を行うため、博士フォーラム実行委員会の学生1名を各ブレイクアウトルームに配置した。その他の参加者は、Zoomの自動的に割り振る機能により、無作為にブレイクアウトルームの割り当てを行った。

6.2. 各ブレイクアウトルームのディスカッションの内容

6.2.1. ブレイクアウトルーム1

人間関係が重要なのではないか。特に、研究室内の後輩とのコミュニケーションは研究だけでなく、日常の種々の物事を円滑に進める上で必要だが、現在はコロナ禍のため全てオンラインになっていて、うまくできていない。後輩の方も先輩に話を聞いてほしいと思っているように思われる。

研究室の雰囲気も大切で、博士学生の自分自身が楽しくできるようにすれば良くなる。指導教員とも共同で研究を進めているなどのチームワークを行っているという気持ちが必要に思われる。博士フォーラムなどの集まりでのコミュニケーションも有効であろう。

6.2.2. ブレイクアウトルーム2

「ラボ・ローテーション」など、いくつかの研究室に所属する機会があれば、研究室の間を移動する際のハードルが低くなるのではないか。他の研究室のことを知らない、仮にアカハラを受けていたとしても、それがアカハラであると気が付くのに時間がかかる。学士課程の3年次になってから、比較的短時間で所属する研究室を決めるのは難しい。しかし、「ラボ・ローテーション」を行う場合でも、学生が「お客さん扱い」されてしまうようでは効果がな

いので、最低でも 2, 3 ヶ月くらいの期間をかけないといけないように思う。

研究費は限られているので、有効利用するためにも、研究機関・研究室の間での共同研究などを進めるべき。国・大学に研究費を出してもらうことも必要。

研究室内の雑用は、将来アカデミアや企業研究所のリーダーなどになった際に役に立つと思うので、プラスな意味で考える。自分がその立場になった時には、学生や部下に同じような雑用を押し付けることがないように。

6.2.3. ブレークアウトルーム 3

主として、キャリア形成などの話題をディスカッションした。自分が行っている研究を、同分野の専門家ではなく、分野外や専門家ではない人に対しても説明する能力が必要である。将来アカデミアとなった際に研究費を獲得するためには重要であるし、企業に就職した場合でもアイデアや企画を認めてもらう必要がある。どこであれ、研究を行うには研究費が必要だし、社会に対する説明責任もあると思う。社会に認められれば、研究費が増え、回り回ってアカデミアや企業研究職のポストも増えるのでは。

6.2.4. ブレークアウトルーム 4

博士課程には、経済的な面や修了要件などに明確ではない部分があり、博士進学を決める際の妨げになっているように思われる。博士進学を決めるまで、経済的な支援を知らない場合もある。大学の経済的な支援として、リーディング大学院などがあることは学士課程のことから周知する必要があるのではないか。研究室に所属する前に、博士課程に進学するという選択肢を考えることは難しい。

博士課程の修了についても、学位取得の要件はあまり明確ではないように思われる。ジャーナルなどの論文発表数など外部の要件が設定されていたりする。同じ博士の学位であるのに、大学毎に基準が異なるのでよいか。また、個々の研究の分野や内容によると思うが、論文数だけで決まるのでよいか。この辺りも、博士課程進学を決める上での懸念の一つになると思う。

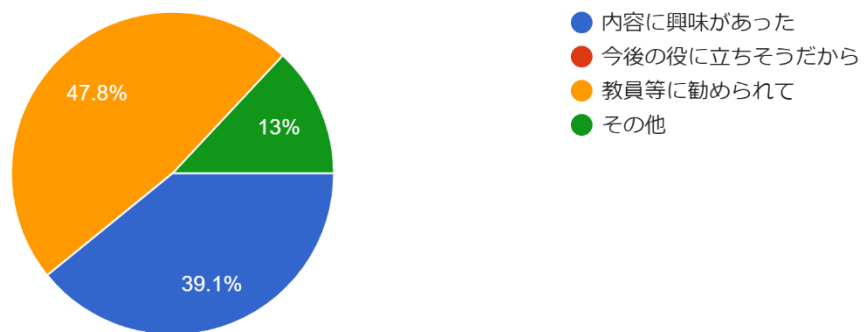
7. 参加者アンケート集計結果

これは、博士フォーラム参加者に、参加動機や実施内容についての感想・意見を収集したものである。回答の収集には Google フォームを用い、フォーム URL は開催中に Zoom チャットを使って回答を依頼した。(有効回答数 : 23)。

7.1. Q1: 博士フォーラムに参加した動機

博士フォーラムに参加した動機は？

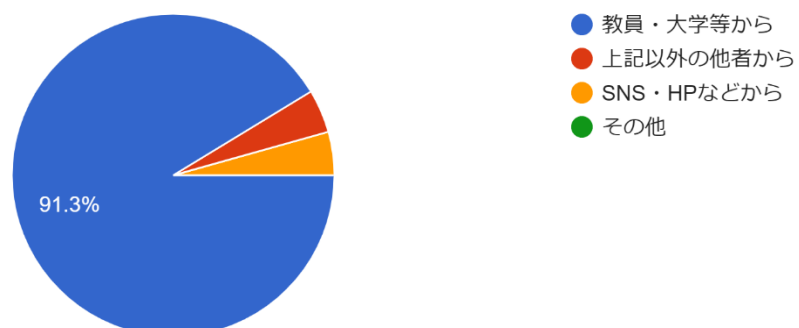
23 件の回答



7.2. Q2: 本年の博士フォーラム開催を知ったのは？

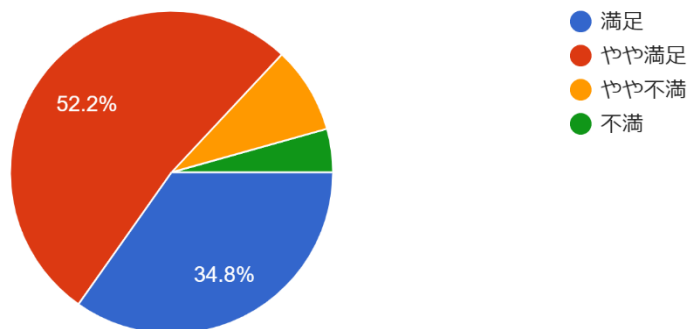
本年の博士フォーラム開催を知ったのは？

23 件の回答



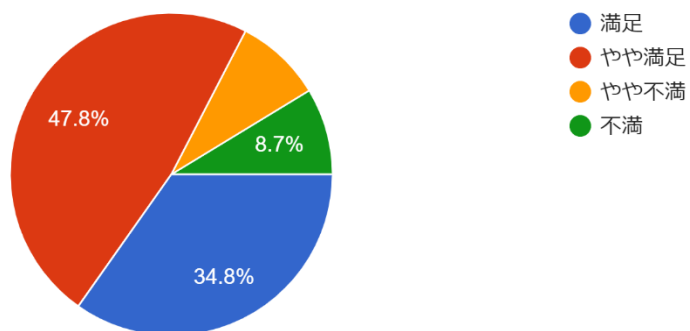
7.3. Q3: 今回のフォーラム会議全体を通しての満足度

今回のフォーラム会議全体を通しての満足度
23件の回答



7.4. Q4: 講演に対する満足度

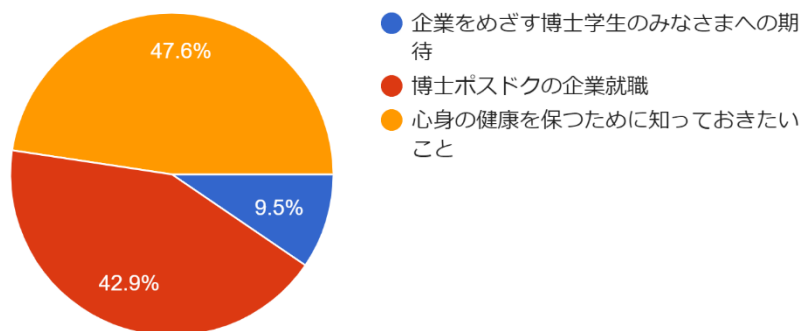
講演に対する満足度
23件の回答



7.5. Q5: 印象に残った講演

印象に残った講演

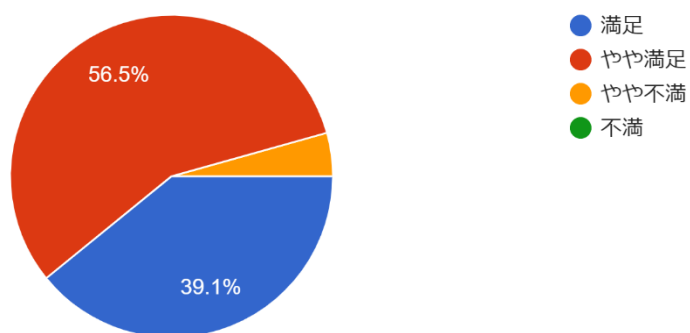
21件の回答



7.6. Q6: アンケート結果の報告に対する満足度

アンケート結果の報告に対する満足度

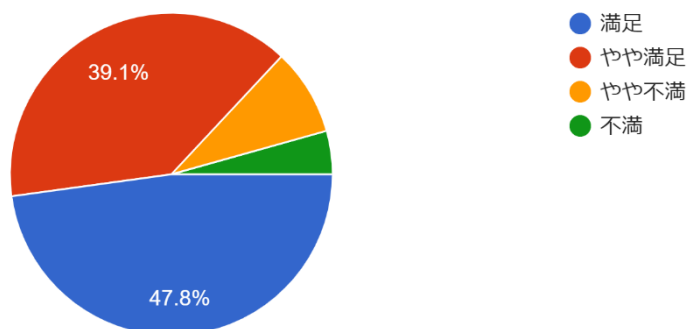
23件の回答



7.7. Q7: グループディスカッションに対する満足度

グループディスカッションに対する満足度

23件の回答



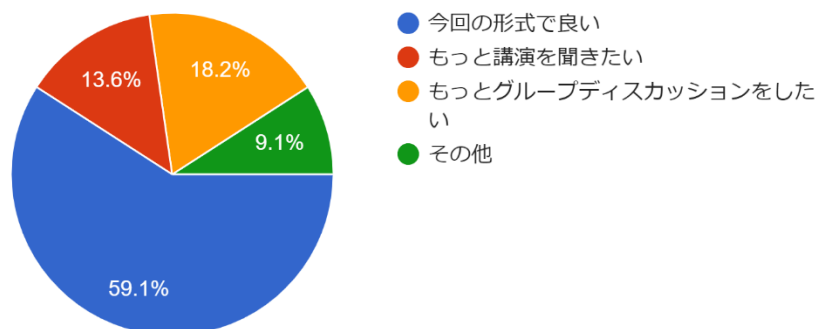
7.8. Q8: グループディスカッションに対する意見・感想

- 思ってたより盛り上がって楽しかった
- ざっくばらんに博士の悩みを相談できたのは嬉しかった。誰が正解で間違いかではなく、みんないろいろな意見を持っていて新鮮な機会になりました。
- 参加している博士課程の学生は非常に賢い、ということがわかりました。
- 「ディスカッション」なのであれば、オンラインだと話しにくい点もあるので、ファシリテーター役を明確にしておくべきだった気がします。
- 話すトピックを何にするかは主催者が決めた方がよいと感じた。
- 長いかと思いましたが、ちょうどよかったです。
- ディスカッションテーマがかなり広いものだったので不安もあったが、それぞれの現状をざっくばらんに意見交換できて、結果として満足度は高かった。
- グループディスカッションが終わってから「提案をしてほしかった」等言われたので、何を話してほしいのか先に言っておいてほしかった
- 日本の博士学生の課題を解決するという意味で、8大学だけではなく地方の大学の方々にも参加していただく（せめてアンケートだけでも）のが良いと感じました。特に、博士号を取得することでどのような将来を描けるのかに関する講演は、現在博士学生が少ない大学でこそより多くの人に聞いていただくことが重要なのではないかと思います。本日はありがとうございました。

7.9. Q9: フォーラムの形式についての希望

フォーラムの形式についての希望

22件の回答



7.10. Q10: 今後の会議開催において、希望するトピック・内容

- 進路
- このように 1. 大学, 2. 学部, 3. 研究室を改善すれば、博士課程に行く学生が増える。
- 担当者様、お疲れさまでした!!
- 科学者としてどのように日本の発展に貢献できるか
- キャリア形成のバリエーションについて
- 事前アンケートの結果報告はとても興味深いものでしたので、次回以降も報告の時間があるといいと思いました。
- 今回は「博士課程を楽しく過ごすために」というトピックだったが、全員すでに楽しんでいたのが話があまり盛り上がらなかった。学振の在り方とか博士課程学生の意義とかもうちょっと盛り上がりそうなトピックのほうがよかった。

8. おわりに

2020年度の八大学工学系連合会 博士フォーラムでは、「博士学生が楽しく研究生活を送るためには何が必要か」を主題として、博士学生の研究生活に存在する困難、例えば、経済的問題や研究室での孤立、アカハラ・パワハラなど種々の困難が存在する。これらについて、今いかなる改革が求められているのかを探ることを目的として本フォーラムを開催した。

具体的には、アンケート結果や専門家の講演などにより話題を提供し、グループディスカッションを通して、博士学生が楽しく研究生活を送るための課題を抽出した。その結果、将来の進路については、アカデミアになる場合にはポスト数の問題などもあるが、企業就職も含めて考えれば、選択肢がないということはない。経済的な面でも、種々の支援があるが、博士を志す前にそれらが十分に周知されているとは言えず、博士進学を迷っている段階では、進学を決心するポジティブな要素にはなっていない。人間関係などの点については、多くの博士学生には、問題がないようであるが、一部の学生には深刻な状況が生じているが、その解決は容易ではないと推測される。

グループディスカッションでは、これら博士学生の研究生活に関わる種々の課題についての意見交換・討論を行い、問題点や課題などを共有し、いくつかの提案を引き出すことができた。しかし、今回の参加者自身は、博士フォーラムの主題に反して、研究生活を比較的楽しく送っている学生が多いようであり、直接的な困難を自身の経験としては持っていないため、議論はあまり発展しなかったようにも思われる。

アンケートやグループディスカッションの結果にはセンシティブな内容も含まれることから、これらの活用には注意が必要であるが、有効に活用されることを期待する。